

過去5年間の教員表彰受賞者及び各取組内容一覧

年度	氏名	校種	校名	職名	主な内容
R4	清野 貴史	小	麻生	教諭	ユニバーサルデザインを具現化した学級経営の工夫や学習指導要領をよく理解し、児童と一緒に授業を作り学習意欲を高める授業の工夫など、児童一人ひとりを大切にされた優れた教育実践を行っている。同僚の教職員、保護者とも協力的に物事を進めることができ、児童、教職員、保護者の意欲や意識向上に影響を与えている。 平成30年度から副読本「かわさき」の編集委員として、郷土資料編集、作成に尽力し、令和3年度には副読本「かわさき」の大改訂に伴い総合教育センターに設置された郷土資料編集研究会に研究委員として関わり、改定の趣旨に則った授業を実践し、他校の校内研修の講師を務めるなど、本市の社会科教育の充実・発展にも努めている。 また、授業の模範を写真に取めながら、日々の授業の振り返りも欠かさずに行い、授業の改善や教材研究についても地道な努力を続けている。非常に物腰が柔らかく、穏やかな点が校長だけでなく、ベテラン教職員や若手教職員からも評価され、また児童や保護者の信頼獲得にもつながっている。
	露木 律文	高	高津(全)	総括教諭	かわさきGIGAスクール構想が開始される前である令和元年度から、生徒のICT活用能力向上やPC等を使った資格試験の受験等に活用していくこと目的として、タブレット端末の生徒一人一台環境を実現し、情報科の授業だけでなく、総合的な探究の時間等でも生徒の興味や湧く授業に取り組み、生徒のICT活用能力や発表力の向上について成果を挙げている。 タブレット端末の導入にあたっては、校内の合意形成や保護者の理解促進などに尽力した。 校内では、教職員の校務効率化を進めるための資料を作成し、率先して研修を行うとともに、情報科以外の教科でも生徒の情報活用能力が育成できるように進んでICTの活用が不得意な教員の相談にも乗り、学校全体の情報活用能力の向上に取り組んでいる。 かわさきGIGAスクール構想の推進校の中では、GIGAスクール構想推進教師（GSL）として川崎のICT活用能力の推進にも尽力しており、市外でも神奈川県高等学校教科研究会情報部会の実践事例報告会で発表し成果を挙げている。
R3	伊東 有希	小	東小倉	教諭	平成29年度版「学習指導要領の改善に係る検討に必要な専門的作業協力者」で得た知識を生かし、校内の教科指導及びカリキュラム研究の要として活躍している。 本校に赴任した平成30年度には、川崎市教育委員会の研究推進校として国語の発表を、令和1・2年度には、研究推進校として道徳教育の発表を行った際の中心であった。なお、令和2年度には文芸発表にとどまらず、道徳教育全国大会の発表者としても予定されていた（新型コロナウイルス感染症の影響で書面開催となった）。 校内では研究主任として綿密な計画立案をし、教職員に対し、「推進委員会便り」を通じて発信や、研究の内容をカリキュラム研究として浸透させるための意識改革に努めた。また、自らの授業実践においては、保護者（図書ボランティア）と児童による読みの交流や、近隣の保育園・幼稚園と連携した授業を行うなど、保護者・地域を積極的に取り込んでいる。 経験はまだ12年だが、教科指導における知識は計り知れないものがあり、常に各地に研修の場を求め勉強している。若手教員の良き手本となる人格も兼ね備えている。
	中嶋 浩二	高	幸	総括教諭	昨年度より学習部が新しい分掌としてスタート。各種校内委員会の業務を引き継ぐとともに、大学新制度入試に向けたeポートフォリオや生徒の基礎学力の向上に向けた新たな取組などを主任として推進している。また、普通科の「幸探究(総合的な探究の時間)」やビジネス教養科の「課題研究」での探究活動における基礎力を身に付けさせるため、学校設定教科「リサーチ基礎」を設置し、令和3・4年度の研究推進校として、研究を進めている。学校設定教科は、教科目標を立てなければならぬなど、0からの立ち上げになるのでいへん努力を要するが、実現させることができた。また、外部団体「モテラボ」との窓口として生徒の探究活動を深めるべく、講演、指導、講評の機会を設けるとともに、教員が指導スキルを身に付けられるような工夫を取り入れている。 地域と共に歩む学校づくりを推進するため、「幸探究」では、幸区役所と連携して地域の課題解決に向けて高校生の自力で解決案を発信するという取組を実践し、成果を上げた。地域広報誌等に掲載されたり、生徒の提案をまとめた冊子を福田市長、幸区長に贈呈するなど、地域と連携し、取組の目的を現実させている。
	信岡 真弓	特	田島	総括教諭	知的教育部門と肢体教育部門の2つの教育課程を有する田島支援学校であるが、肢体教育部門は経験の少ない教育部門である。その上、近年においては、医療的ケアを必要とする児童生徒の入学が連続しその人数も増え、必要な医療的ケアの種類も増えている。そうした児童生徒の学校生活を充実したものにするためには、日々の指導内容の改善も必要であるが、医療的ケアを安全に実施するマニュアルが欠かせない。マニュアルを作成するためには、児童生徒の状態はもとより、医療行為を実施する看護師や教員、安全を確認する養護教諭の理解、保護者の意向も組み入れながら検討する必要がある。田島支援学校は事例が少なく、作成は困難なものであったが、当該教諭の県立校での経験、子どもたちの生活を豊かにしようとする愛情、保護者に寄り添う姿勢があら、主治医、指導医、教育委員会事務局の助言を受けながら、粘り強く、一人ひとり、あるいは様々な医療行為のマニュアルを作成してきた。人工呼吸器の使用が必要となる児童の保護者の意向にも真摯に取り組み進んでいる。
R2	黒川 邦子	中	渡田	総括教諭	学校経営の視点を常に持ちながら、常に生徒に寄り添い、生徒一人一人の成長のために積極的に関わる姿は、学校職員全体の指針となっており、経験の浅い教員に対しては、アドバイスを与えるだけでなく、良き相談相手となることで、若手教員の育成にも尽力している。 また、学校教育目標の具現化に向けて、学習指導上の課題解決においてはリーダーシップを発揮し、校内研究の推進、学習会の企画・運営、学習手引きの作成など、学習指導及び学習評価の方向性を学校全体に浸透させることで、「わかる授業」、「基礎基本の定着」だけでなく、全校生徒の学力向上のため、常に生徒の実態を的確に把握して最大限の効果が出るよう工夫されている。 地域から講師を招いて体験調理を行う「ワークショップ渡田」では、職員間及び地域との連携を密に図り、企画の立ち上げから運営まで中心となって取り組むなど、地域に根差した学校づくりにも多大な貢献をしている。
	小嶋 智加	小	中野島	教諭	思春期の難しい課題を抱えた児童、登校渋りや不登校などの困難を抱える児童に対して、児童の話をよく聞き児童理解を深め、児童の不安を取り除く等の心のケアに努めている。 また、保護者との連携を様々な工夫をしながら密に図り、問題の改善に向けて工夫した取組を実践している。 さらに、児童支援コーディネーターや教務主任、用務員等、様々な人と児童との関わりを大切に、教職員みんなで児童を見守る体制を築き上げるとともに、きめ細かく支援や配慮、明るく声掛けなどによって、どの児童もクラスに温かく迎えられる環境作りを力尽くしている。 児童指導の校内における研修では、指導・支援の手立てを工夫し、指導による児童の変容、教育的効果を分析する取組を示しており、他の教員に大変参考になるものである。 実践力、リーダーシップ等、本教員の取組は、波及効果がある。
R1	住吉 幸代	中	有馬	総括教諭	生徒一人一人の気持ちに寄り添った指導法は、校内生徒指導体制の推進・改善の礎となり、学校運営に貢献している。 昨年度から生徒指導担当として、学校全体の生徒指導を司り、同時に宮前地区学校警察連絡協議会の事務局としてもその職責を果たす中、川崎市中学校生徒指導部会の常任委員としても活躍し、その取組姿勢は、経験の浅い教員の目標となり、ミドルリーダーの手本となっている。 また、地域や関係諸機関の催しや諸会議に積極的に参加することにより、自治会役員、民生委員、保護司、保護者等との関係を構築し、学校と地域をつなぐパイプの役割を果たしている。
	榊原 洋介	小	木月	教諭	木月小学校は、「キャリア在り方生き方教育」が全市的に実践される以前より、その研究推進校として、地域との関わりにより、児童の力をつける明確な方向性を示し、研究を推進している。 研究主任として、実践を重ね、平成29年度に総合教育センターの長期研究員を務め、今後の「キャリア在り方生き方教育」の方向性を提案することに尽力し、社会に生きていく力の育成や将来の実生活につなげるには、教師が「人との関わり・学びのつながり」を意識した授業改善を行うことが大切である等、研究を通して全市に発表し、「キャリア在り方生き方教育」の授業実践例を数多く市内各学校へ提案し、全市的な広がりにも大きく貢献している。
H30	森久 陽子	渡田		総括教諭 (養護教諭)	緻密に計画を立て、生徒一人ひとりにきめ細やかに接し生徒が利用しやすい保健室経営を行っています。 学校保健会養護部会の部会長を長年務め、市内各学校と学校保健会や研究会とのパイプ役も担い、市内の健康教育の発展向上のために力を尽くしています。 初任者研修の講師や地区研究会等を通じ他校の養護教諭へのアドバイスを的確に行い、後進の育成にも力を注ぎ、本市の養護教諭の資質・能力の向上にも貢献しています。
	井上 教夫	中	野川	総括教諭	「かわさき共生＊共育プログラム」の作成委員として実践開始当初から関わり、毎年講師を務めるなど、先進的に実践し、同プログラムの実践事例の提示などを行い、市内全校への広がりにも大きく貢献しています。 また、在籍した学校では、様々な課題を抱えた生徒に対して、親身になって寄り添い、決してあきらめることなく粘り強く関わり、生徒の精神面を支えています。 こうした取組を行う姿勢は、校内の若手教職員に「人と関わることの大切さ」を伝えるだけでなく、「人との関わりを大切にされた教育」の実践など、教職員の育成にも大きく貢献しています。さらに、関係諸機関とのパイプ役として地域力の活性化にも力を尽くしています。
	慶野 久美子	南生田		総括教諭	特別支援学級の主任、支援教育コーディネーター主任、生徒指導部主任を兼務し、学校全体を視野に入れた校内の特別支援教育、人権尊重教育に基づいた研修や取組の中心を担っています。 「特別支援教育」や「支援教育」の具体的な実践として、過ごしやすい学級づくり、わかりやすい授業づくりに取り組み、また、常に生徒や教職員を尊重する態度は、教職員の模範となっています。 さらに、中学校教育研究会特別支援教育部会では、常任委員を務め、特別支援学級等新任者研修において、特別支援学級経営の講師として、全市の特別支援教育にも大きく貢献しています。

※過去5年間の受賞者の一覧になります。
※受賞時点での情報を基に作成しています。